

のもよかろうと思ったので、涼みがてらに宵から出かけた。二十六夜の月の出るのは夜半よなかにきまつているが、彼と同じような涼みがてらの人がたくさん出るので、どこの高台も宵から賑わっていた。

彼はまず湯島天神の境内へ出かけて行くと、そこにも男や女や大勢の人が混みあっていた。その中には老人や子供も随分まじっていた。今とちがって、明治の初年には江戸時代の名残りをとどめて、二十六夜待などに出かける人た



おかもときどう  
岡本綺堂 (1872 ~ 1939)

本名 岡本敬二 東京生まれ。  
父親は維新後イギリス公使館  
の書記。

父親に漢詩を、叔父や公使館の留学生に英語  
を学ぶ。

小説家。劇作家。代表作「半七捕り物帳  
1917」「番町皿屋敷 1917」「修禅寺物語  
1918」など。新聞記者をへて1913年以降作  
家活動に専念。シャーロック・ホームズの影  
響を受けて日本初の岡っ引き捕り物帳「半七  
捕り物帳 7」で江戸情緒あふれる描写をし、  
長い人気を博した。また「世界怪談名作集」  
や「支那怪奇小説集」などの翻訳作品もある。

い、ただ黙って突っ立っているのだが、それがだんだんに彼の恐怖を増すばかりで、彼はもうどうしていいか判らなくなつた。自分はこのばあさんに取付かれたのではないかと思つた。

月の出るにはまだ余程時間があるのだが、彼にとってはもうそんなことは問題ではなかつた。なにしろ早く家へ帰ろうと思つたが、その時代のことだから電車も鉄道馬車もない。高輪から人力車に乗って急がせて来ると、金杉の通りで車夫は路ばたに梶棒かじぼうをおろした。

「旦那、ちよいと待ってください。そこで蠟燭ろうそくを買つて来ますから」

こう言つて車夫は、その荒物屋へ提灯の蠟燭ろうそくを買いに行った。荒物屋——昼間のおかみさんのことを思い出しながら、彼は車の上から見かえると、自分の車から二間ほど離れた薄暗いところに一人の婆さんが立っていた。それを一と目みると、彼はもう夢中で車から飛び降りて、新橋の方へ一目散に逃げ出した。

師匠の家は根岸だ。とてもそこまで帰る元気はないので、彼は賑やかな夜の町を駆け足で急ぎながら、これからどうしようかと考えた。かのばあさんはあとから追つて来るらしくもなかつたが、彼はなかなか安心できなかった。三十三間堀の大きい船宿に師匠をひいきにする家がある。そこへ

ちがなかなか多かつたらしい。彼もその群れにまじつてぶらぶらしているうちに、ふと或るものを見付けてまたぞつとした。その人ごみのなかに、昼間下谷の空家で見た婆さんらしい女が立っているのだ。広い世間におなじような婆さんはいくらかもある。ばあさんの顔などというものは大抵似ているものだ。まして昼間見たのはその横顔だけで、どんな顔をしているのか確かに見届けた訳でもないのだが、どうもこのばあさんがそれに似ているらしく思われてならない。幾たびか水をくぐつたらしい銚子縮ちやしちぢみの浴衣ゆかたまでがよく似ているように思われるので、彼は何だか薄気味が悪くなって、早々にそこを立去つた。

彼は方角をかえて、神田から九段の方へ行くと、九段坂の上にも大勢の人がむらがつていた。彼はそこで暫くうろしてしていると、またぞつとするような目に逢わされた。湯島でみたあのばあさんがいつの間にかここにも来ているのだ。彼はもし自分ひとりであつたら思わずきやつと声をあげたかも知れないほどに驚いて、早々に再びそこを逃げ出した。

彼はそれから芝の愛宕山へのぼつた。高輪の海岸へ行つた。しかも行く先々の人ごみのなかに、きつとそのばあさんが立っているのを見いだすのだ。勿論そのばあさんが彼を睨むわけでもない、彼にむかつて声をかけるわけでもな

行つて今夜は泊めて貰おうと思いついて、転げ込むようにその門かどをくぐると、帳場でもおどろいた。

「おや、どうしなすつた。ひどく顔の色が悪い。急病でも起つたのか」

実はこういうわけだと、息をはずませながら訴えると、みんなは笑い出した。そこに居あわせた芸者までが彼の臆病を笑つた。しかし彼にとっては決して笑いごとではなかつた。その晩はとうとうそこに泊めてもらうことにして、肝腎の月の出るころには下座敷の蚊帳かやのなかに小さくなつていた。

あくる朝、根岸の家へ帰ると、ここでも皆んなに笑われた。あんまり口惜しいので、もう一度出直して御徒町へ行つて、近所の噂を聞いてみると、かの貸家には今まで別に変つたことはない。変死した者もなければ、葬式の出たこともない。今まで住んでいたのは質屋の番頭さんで、現に同町内に引越して無事に暮らしている。しかしその番頭の引越したのは先月の盂蘭盆うらぼん前で、それから二、三日過ぎで迎火をたく十三日の晩に、ひとりの婆さんがその空家へはいるのを見たという者がある。

その婆さんはいつ出て行つたか、誰も知っている者はなかつたが、その後ときどきに、そのばあさんの坐っている姿をみるといので、家主の酒屋でも不思議に思つて、店